



バガボンド・ララバイ～近松半生記～

「残れとは思ふもおろか埋み火の 消ぬ間 あたなる 朽ち木書きして」

辞世の句に込めた真の心の内とは？日本のシェークスピア「近松門左衛門」の謎に迫る！

「上演台本に、作者名を記載する？！どうかしているんじゃないのか…？」

歌舞伎や浄瑠璃などの芸能世界ではいつだって演じ手が主であった江戸時代、作者は、どのように面白い台本を書こうと、その名前が表に出されることも無く、地位は本当に低いものでした。しかしながら、英雄物語が主流の時代に庶民を主人公にした戯曲を大ヒットさせ、さらには、この人気本を書いたのは「近松門左衛門」である！と、その上演台本に作者名を記載することを業界に承認させたその男は、因習と習わしを重んじる当時の芸能界に变革という一大波紋を巻き起こしました。近松門左衛門は、72歳で亡くなったそうですが、その死の間際まで本を書き続けたと言われています。この作品は、彼の飽くなき探究心と情熱の源を探し当てるべく、遺された辞世の句をヒントに劇団往來が脚色し、浄瑠璃と歌舞伎の世界を彷徨いながら、作者としての夢を追い続けた男「近松門左衛門」の人生を描きました。現代劇と時代劇が巧みに展開される構成舞台に、歌舞伎仕立の「曾根崎心中」や「女殺し油地獄」などが劇中劇で登場するなど、近松ワールドを存分にお楽しみいただきながら、何とかして良い舞台を創りたいという現代劇団員たちの思いと、近松の情熱が、やがて時を超えて重なってきます。一人5役を筆頭に役者の早変わりもお楽しみ！日本のシェークスピアここにあり！古典「近松門左衛門」が現代の私たちに送る人生へのエールを受け取ってください！

《近松門左衛門 ヒストリー》

承応二年(1653年)誕生。本名は杉森信盛、幼名を次郎吉と言う。父親は杉森信義で、近松門左衛門はその次男に生まれた。父は越前の松平忠昌に仕える300石どりの武士だったが、近松が15～16歳の頃、浪人となり、一家を上げて京都に移住。恵まれた生活ではなかったが、近松はその後、一条恵観や阿野実藤という第一級の公家たちに仕える機会を得、京都という豊かな文化的風土の中で作者となるべく礎を育んだと考えられる。芸能界入りの時期や作者としてのデビュー作については不明。当時(1670年頃)京都で人気だった「宇治加賀じょう」の元で、浄瑠璃を作ったあたりから知られている。「世継曾我」や「出世景清」など、古い英雄ものに近世的情調を盛り込んだ彼の作品は浄瑠璃界に新風を巻き起こし、彼の作者としての道を確かなものとすると同時に、古から新へと浄瑠璃史を塗り替えていくこととなる。その後、歌舞伎の坂田藤十郎のために狂言台本を書くなど、作者としての新しい道を開拓。浄瑠璃台本約140作、歌舞伎台本約30作を世に送り出し、享保9年(1724年)、72歳の生涯を閉じる。

- ・上演時間：1時間50分
- ・出演者数；10名
- ・脚 本：松本泰成
- ・演 出：要 冷蔵



バガボンド・ララバイ

～～近松半生記～～



元えもん侘りまひょ

人に語り継がれるほどの、元えもんつくっていきまひょ

ここは、とある劇団。座付作家の小山は座長の命令で、次回公演に向け、江戸時代の有名な戯曲作家「近松門左衛門」について調べていた。そしてその資料の中に、近松が晩年に書いたという辞世の句を見つける。そこには死を間近にした彼が、自らを“世のまがひ者（まやかし者）”と称した言葉が残されていた…。

.....

反逆児、自信家と呼ばれながらも、その斬新な作風で浄瑠璃史を塗り替えた近松門左衛門とは一体どんな人物だったのでしょうか？

劇団往来が独自の感性で、その熱き人物像に迫ります！



「この世の名残、夜も名残、
死には行く身をたとふれば…」



GENGO WA GAKURAI, GAI:
GEIJU WA SAKAGU DAI